

あなたのスキルは社会に役立つ

エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第131回

ライト公文書づくりワークショップ——自治体の文書がこんなにわかりやすい訳がない!

- Code for Oita / シビックテック広場 佐藤 哲也 (さとうてつや) [Twitter @satetsu](https://twitter.com/satetsu)
- シビックテック広場 筈井 淳平 (はずいじゅんぺい) [note https://note.com/hazuijunpei](https://note.com/hazuijunpei)

音声 SNS「Clubhouse」^{注1}で、毎週金曜日の夜にシビックテックをテーマにしたトークルーム「シビックテックを語ろう」を開催しています^{注2}。今回は、このトークルームでの会話をきっかけに実施したオンラインイベント「ライト公文書づくりワークショップ 自治体の文書がこんなにわかりやすい訳がない!」^{注3}の様をお伝えします。

行政の出す公文書は読むのが難しい?

ワークショップ開催のきっかけ

行政が発行する文書(公文書)って読むのが難しいですよね。公文書がなぜ難しいのかというテーマについて、6月3日の「シビックテックを語ろう」で議論を重ねた結果、今回のイベント開催に至りました。小説の中でも軽めの文体で書かれることの多いライトノベルのように、読みやすいライトな公文書があっても良いのではないかという意図から、「ライト公文書づくり」というタイトルのワークショップになりました。

イベントにはシビックテックに取り組む人、自治体職員、日本語教育の専門家など9人がオンラインで参加しました。イベントの前半は公文書が読みにくい理由と、読み手に伝わる文書を書くための考え方についてディスカッションを行いました。後半は

注1 <https://www.clubhouse.com/>

注2 本連載の第119回(本誌2021年11月号)で取り上げました。

注3 <https://peatix.com/event/3303990>

実際に発行された公文書を読みやすくする編集作業を、2グループに分かれて行いました。

公文書がわかりにくい原因

ライト公文書づくりワークショップでは、岩田一成氏の著書『新しい公文書作成ガイドブック わかりやすく伝えるための考え方』^{注4}を参考にしました。岩田氏は同書の第15章で、公文書がわかりにくい原因を5つのパターンで示しています。

●専門用語が多用されがち

公文書は硬い文章になる傾向があります。とくに法律文を背景に持つ文書では法律文から借用してきた文章を使うため、漢字の多い、硬い文章になりがちです。この傾向は公文書に限った話ではありません。文中で業界の専門用語やカタカナ語を多用してしまうケースにも当てはまります。このような文章は、その業界に属さない読み手には伝わりにくい文章になります。

●クレーム対策のために詳細に書き過ぎてしまう

文章に、知っていることをすべて書こうとするとその文章は長くなります。文章をより詳しく、より正確に書けば書くほど、わかりやすさが損なわれていきます。複雑な制度を文章で説明する場合、漏れなく詳細に書いておかないと「書かれていないですよ」というクレームが発生するかもしれません。

注4 岩田一成 著、日本加除出版、2022年
<https://www.kajo.co.jp/c/book/04/0404/40892000001>

そのため、クレームを避けようと詳細を足していくと、その分文章は長く、わかりにくくなります。

●ストレートに書けない内容に対応するため、回りくどい表現になってしまう

公文書を書いていると、「市民(読み手)に費用負担が生じるような制度は丁寧に書かなければならない」という心理が働くことがあります。ストレートに「今すぐお金を払ってください」と書くとかクレームが発生するかもしれませんが、ストレートに書かずに回りくどい表現ばかりが増えていくと、今度はわかりにくい文章になってしまいます。

●構成を作り込む前に書き始めてしまう

文章を書く前に構成をしっかりと作っていないと、読みやすい文章にはなりません。文章は誰に何を、どんな順番で書くか、その情報を整理整頓しておく必要があります。『文章は「書く前」に8割決まる』という書籍も出ているほどです^{注5}。時間をかけて全体の構成を作り込みましょう。

●読み手の目線を想定しきれていない

読み手の立場や気持ちを考えていないと、書き手目線の文章になってしまいます。とくに公用文では読み手の状況把握ができていないと、法律文から借用してきた漢字の多い文章を使っても大丈夫だろうと考えてしまいがちです。

日常的な作文にも役立つ「公用文作成の考え方」

文化庁の文化審議会は2022年1月、読み手に伝わる文書を書くための手引きとして「公用文作成の考え方」を文部科学大臣に建議しました^{注6}。公用文作成の基準が変わるのは70年ぶりです。「公用文作成の考え方」では、公用文を「読み手とのコミュニケーション」としてとらえると定義しています。

この考え方は公文書だけではなく、私たちが文章を作成する際にも役立つ考え方です。日常的な作文に役立つ部分をピックアップしてみましょう。

読み手を想定する

広く一般の人が読むことを想定した文章では、義務教育、つまり中学3年生までに学ぶ範囲の知識で理解できるようにします。たとえば、遠回しな書き方を避けたり、主旨を明確にしたりといったことを考えます。専門用語や外来語をむやみに使わず、読み手に通じる言葉を選びましょう。文章を読んだ人が理解し、行動しやすいように書くことが重要です。

逆三角形型の構成にする

文章の性格に応じて構成を工夫します。とくに結論は早めに示し、続けて理由や詳細を説明するといった構成が良いでしょう。これは新聞の世界では逆三角形型の構成と呼ばれています。重要なことから順に説明していく構成パターンです。

タイトル・見出しを具体的なものにする

公文書ではタイトルに「○○について」とつけられたものをよく見かけます。「○○」について記述していることは明らかなので、「について」の部分はあまり必要ではなく、より具体的なタイトルにしたほうが良いでしょう。また、タイトルの文字数にも気を配りましょう。文字数は少なく端的にまとめることが重要です。

一文の長さを40～60文字にする

わかりやすい文にするために、一文の長さを40文字から60文字程度にします。読点でつないで文章を長くしていくと主語と述語の関係が複雑になり、読み手にとっての負担になります。一文には情報を詰め込まずにひとつの論点を入れるようにして、論点が2つ以上になる場合は、文を分けましょう。

また、「○○された」という受動態をむやみに使わないことも重要です。受け身の表現は行為の主体が誰なのかがあいまいになってしまいます。能動態で「(誰が)○○した」と表現しましょう。

注5 上阪 徹 著、サンマーク出版、2011年
<https://ydm.sunmark.co.jp/book/b100000571.html>

注6 https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/93650001.html



公文書は、私たちの手でどこまでライトにできるか？

実際に公文書をわかりやすくしてみよう

以上の説明をふまえて、オンラインイベント後半は公文書をライトにするワークショップを実施しました。題材として選んだのは、文部科学省が令和4年5月24日に発行した文書「学校生活における児童生徒等のマスクの着用について」(図1)^{注7}です。

ワークショップの前半で紹介した「公用文作成の考え方」に照らし合わせてみると、この公文書はどうでしょうか。何を言いたいのかすぐに理解できる人は少ないのではないのでしょうか。

まず、「学校生活における児童生徒等のマスクの着用について」というタイトルです。マスクの着用についての文書、ということ以外に具体的な情報が伝わってきません。ここでは伝えたいこと、つまり

注7 <https://www.pref.oita.jp/uploaded/attachment/2144018.pdf>

◆ 図1 「学校生活における児童生徒等のマスクの着用について」(抜粋)

文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課

学校生活における児童生徒等のマスクの着用について

先日5月20日に厚生労働省から別添「マスク着用の考え方及び就学前児の取扱いについて」が公表され、

- ・ マスクの着用は引き続き基本的な感染対策であること
- ・ 身体的距離が確保できないが、会話をほとんど行わない場合のマスク着用の考え方を明確化すること
- ・ 就学前の児童(2歳以上)のマスクの着用はオミクロン株対策以前の取扱いに戻すこと

等が示されました。また、昨日お知らせしたように令和4年5月23日には、それも踏まえて、政府における「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」(以下「基本的対処方針」という。)が変更されたところです。

これらを受けて、特にこれから夏季を迎えるに当たり、学校生活における児童生徒等のマスクの着用について改めて御留意いただきたい点をまとめましたので、お知らせします。

都道府県・指定都市教育委員会担当課におかれては所管の学校及び城内の市(指定都市を除く。)区町村教育委員会に対して、都道府県私立学校主管部課におかれては所轄の学校法人等を通じて、その設置する学校に対して、国公立大学法人担当課におかれてはその設置する附属学校に対して、文部科学大臣所轄学校法人担当課におかれてはその設置する学校に対して、構造改革特別区域法(平成14年法律第189号)第12条第1項の認定を受けた地方公共団体の学校設置会社担当課におかれては所轄の学校設

1

「学校生活においてマスクの着用が不要な場面」を伝えるほうが適切でしょう。

また、一文の長さにも注目してみてください。この文書には8つの宛先が記載されています。そのため、宛先ごとに「宛先Aの場合は○○、宛先Bの場合は○○」と記述が条件分岐するような箇所があり、一文が437字と長くなってしまっています。

2チームに分かれて編集作業を実施

ワークショップでは2つのチームに分かれて「学校生活における児童生徒等のマスクの着用について」を読み解き、どのような文章なら読み手が理解しやすいか、それぞれの考え方で内容を整理しました。その後、チーム内で議論しながらGoogleドキュメントで共同編集を行いました。当初1時間で完了すると思っていた編集作業は予想を超えて1時間半もかかりましたが、イベント終了の20分前にいったん区切りを付けました。

チーム1の編集作業では、メンバー全員で「ここがわかりにくい」という点を話し合ったあと、文面から「マスクを着けなくても良いのは、暑い日と外で体を動かす日である」という条件と「小学生向けの留意事項と、幼稚園児以下向けの留意事項がある」という条件があることを確認しました。そのうえで、どちらを上位にするのかという議論を行い、最終的に前者を上位とする形でまとめました。

またチーム2の編集作業では、まず文章の構造を把握しようと、段落やカッコ書きの中身がそれぞれ何を言っているのか、その意味を1つずつ把握して、順序を入れ替えたり、必要に応じて例示を省いたりするような調整を行いました。

いずれのチームも「全体的に文章構造が複雑になっている」という印象を受けたようで、文章構造を把握するのに悪戦苦闘していました。

「やさいちチェッカー」で公文書のわかりやすさを判定してみよう

各チームで編集作業を行った文章は、元の公文書に比べてどこまでわかりやすくなったのでしょうか。文章のわかりやすさを判定するために、Web上で公開されているツール「やさいちチェッカー」^{注8}を利用しました。「やさいち」とは「やさしい日本語」のことで、弘前大学の佐藤和之教授らによって提唱されたといわれています。1995年の阪神・淡路大震災での経験をもとに、外国人などに避難情報を伝える簡潔な日本語の表現手法として考案されました。

やさしい日本語は、おもに次のような点を重視しています。

- 重要度が高い情報に絞り込む
- あいまいな表現は避ける
- 難しい語彙(熟語や文法など)は言い換える
- 一文を短く、構造を簡単にする

やさいちチェッカーは文章の形態素解析を行い、上記の観点をもとに語彙／漢字／硬さ／長さ／文法の5つの指標で読みやすさを判定するツールです。

図1の公文書をやさいちチェッカーにかけると、A～Eの5段階評価で最低の「E」判定が出ました。名詞が詰め込まれすぎている、一文が長すぎたりといったことが影響しているようです。

次にチーム1、チーム2それぞれの編集結果を判定したところ、どちらも「C」判定でした。語彙や漢字を平易なものに置き換えるところまでは両チームとも踏み込めなかったのですが、一文あたりの名詞の多さや、一文の長さ^{注9}などは改善できたようです。

公文書の書き方に唯一の正解はありませんが、読み手を想定したり構成をシンプルにしたりといった、試行錯誤のプロセスの大切さがわかりました。

各地の「公用文・文書作成の手引き」をハックしよう

本稿で紹介した「公用文作成の考え方」は、今後政

注8 <http://www.4414uj.sakura.ne.jp/Yasanichi1/nsindan/>

注9 具体的には、一文の長さが平均20語以内になると「やさしい」と評価されます。

府内で活用されるように文化庁の文化審議会で作られたものです。一方、全国の自治体にはさまざまな公用文作成の手引きやガイドラインが存在しています。多くの自治体ではそれらを公表または販売していますので、ぜひお住まいの自治体のものを手にとってみてください。今回のワークショップでは公文書にありがちな複雑な文章構造を中心に取り上げましたが、文章構造をわかりやすくするための指針についても示されています^{注10}。

筆者の所属しているシビックテック広場というコミュニティでは今後、昨今の「デジタル時代」や「オープンガバナンス」といった流れに即したものに公文書をバージョンアップするため、市民と行政が一緒になってハックできないかと考えています。

たとえば自治体によっては、公用文作成の手引きに次のような記述があります。

- 1ページの行数は、30行～40行程度とする
- 1行の字数は、35字～45字程度とする
- 字の大きさは、10ポイント～12ポイント^{注11}程度とする

一見問題ないように思えますが、このフォーマットは公文書をA4版の紙に印刷することが前提になっています。スマートフォンで文章を読むことが当たり前になった今、この前提は適切なものなのでしょうか。また、公文書には「1桁の数字は全角で、2桁の数字は半角で表記する」というルールもよく見かけます。数字の全角半角が混在する文章はデータ処理が難しくなります。これは時代にそぐわないルールなのではないでしょうか。

文章のわかりやすさだけでなく、このような観点で自治体ごとに異なる公用文作成の手引きを市民が読み、市民にとってわかりやすい公文書を行政と一緒に考え、一緒に改善する。今後はそういった取り組みを増やしていきたいと思います。SD

注10 「東京都文書事務の手引」、東京都、2021年、P.210
https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/iken-sodan/room/room/bunya/b_tosei.html

注11 ポイントとは文字の大きさの単位のこと、たとえば10ポイントだと一辺が約3.53mmとなります。